

## 城址公園の木 その1

## ケヤキ

太田道人

ケヤキは昔、槻（つき）と呼ばれていました。槻は、強木（つよき）からきたと言われているくらい長寿で大木になり、条件がよければ、直径2m、高さ50mにも生長します。古くから神聖な木であつたらしく、寺院の建築用に使われたり、お宮の庭によく植えられたりしています。

材木としては、強くて耐朽性もあり、木目がきれいなので、家具や仏像・楽器などに広く利用されています。また、弥生時代の遺跡から出てくる食器類には、ケヤキが使われていたそうです。

このように、昔から利用価値が高かったケヤキは、人々のまわりに、たくさんあつたと考えられます。ケヤキが自然に生えているところは、山のすそや湿り気の多い斜面などで、ときどき林をつくって、山をおおっていることもあります。富山県では、神通川や常願寺川などの中流から少し山手に入ると、ごく普通に見られる落葉広葉樹です。でも、直径2mの大木というのは、柱用に切られて、ほとんど残っていません。

ケヤキは、四季を通じて私達の間を楽しませてくれる木で、春には、明るい黄緑色の葉を開き、夏には木陰をつくり、秋には鮮やかに紅葉し、冬には、たくましい枝ぶりを見せてくれます。公害に弱い木なので、空気のきたない所では、紅葉の色もさえず、ひどい時には、夏でも葉が落ちることがあります。しかし、富山市の中心部城址公園で、80本以上ものケヤキが、毎年鮮やかに紅葉するという事は、富山の空気が、それだけきれいだということを示しています。これらのことから、富山市では、ケヤキを市の木と定めて、公園や歩道には多く植えるようにしています。公害に弱い木を市街地に植えるというのは、ちょっとおかしように思えますね。でも、弱い木だからこそ空気のよごれを葉の色や落葉で、私達に教えてくれるのです。

ケヤキを見分けるポイントは、ホウキをさかさに立てたような枝ぶり、皮がはがれおちて、幹（みき）の肌がでこぼこしているところです。

（おおた みちひと 植物担当）



図1 ケヤキの葉



写真1 ケヤキの樹形

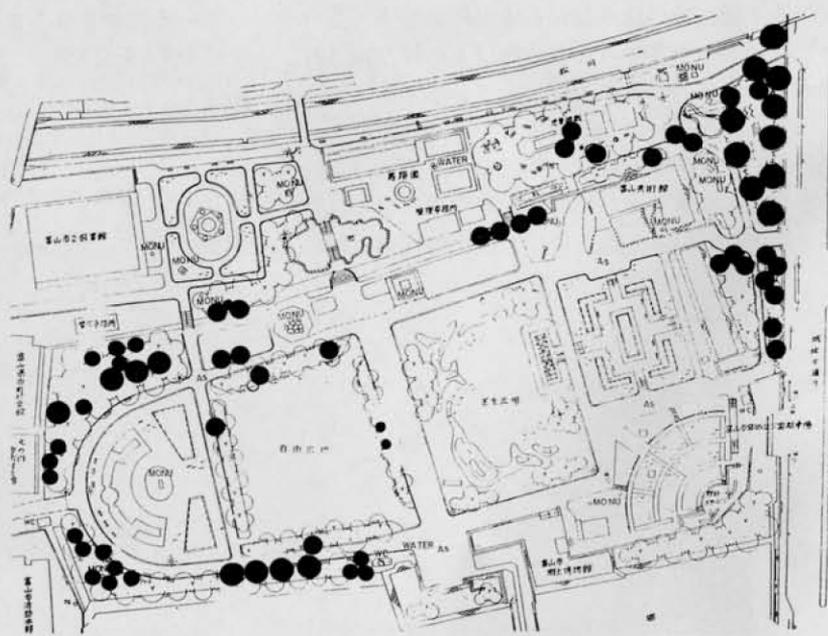


図2 城址公園のケヤキ分布図 ●がケヤキ。